

平成20年度 大学等における放射線安全管理研修会報告  
(8月26日 東京大学)

講演で使用されたスライドの印刷物など、配布された資料は遺伝子機能解析分野事務室に保管されています。ご覧になりたい方は連絡をお願いします。

・プログラム

講演 「放射性同位元素の規制に係る最近の動向」

文部科学省科学技術・学術政策局原子力安全課 放射線規制室長 中矢隆夫

特別講演 「ICRP2007新勧告について-作成の経緯と要点-」

国際医療福祉大学放射線医学センター長 佐々木康人

依頼講演 「クライシス・コミュニケーション-誤解と社会不安を避けるために」

シニアリスクコンサルタント (有) エンカツ社 宇於崎裕美

「大学等の放射線施設における緊急対策マニュアルについて」

緊急時対応マニュアル編集委員会 斉藤 直

「外国人のための教育訓練用資料作成について」

外国人のための教育訓練に関する検討委員会 松田尚樹

大学等の放射線施設における作業環境測定アンケート結果について

法人化対応専門委員会法令対応WG 片田元巳

その他の委員会活動、今後の活動他

大学等放射線施設協議会会長 巻出義紘

最初の講演「放射性同位元素の規制に係る最近の動向」では、まず平成19年度の事故事例が挙げられた。オートクレーブ内の廃棄物を誤って一般廃棄物として捨てた例が示され、オートクレーブ時にきちんと札をつけていれば防げたはずとのコメントがあった。液体シンチレーションカウンターの密封放射性同位元素を装置と一緒に産業廃棄物として処理した例が示され、H17改正法より、普段は規制を受けていないが廃棄の時には基準に従うようになっているので注意とのコメントがあった。漏水の例が挙げられ、コンクリート中の配管が腐食することが多いとのコメントがあった。RIを故意に管理区域外に持ち出し散布した例が示され、管理を強化し、単独では保管庫からRIを取り出せないような運用が望ましいとのコメントがあった。

犯罪に結びつく想定外のトラブル、管理下でないRI発見のトラブル、施設の劣化に因るトラブルが多いことが報告され、鍵の二重化や管理責任者のみの鍵の使用など管理方策の見直し、保管庫への立ち入りと放射性同位元素の持ち出しの際の複数者によるチェック体制の実施、RIの在庫確認の徹底による異常の早期発見、異常を発見した場合の迅速な通報連絡体制の構築があらためて要請された。

地震、事故時の連絡方法について再確認があった。

特別講演 「ICRP2007新勧告について-作成の経緯と要点-」については資料をご覧ください。

依頼講演 「クライシス・コミュニケーション-誤解と社会不安を避けるために」では、何かの時のマスコミ対応の重要性が強く語られました。討論では、やはり記者とは大きな考えかたの違いがある、これを少しでも小さくするためには普段から記者とコミュニケーションをとっておくことが重要との意見が出された。

「大学等の放射線施設における緊急対策マニュアルについて」では、委員会によってまとめられたモデルマニュアルが示された。マニュアルでは、火災を発見したら（可能であれば消火に努め）、管理室・放射線取扱主任者に連絡し、ここから消防に連絡する、となっている。フロアから、自分の施設では、発見者が消防署に連絡するよう消防署から指導されたため、そのようなマニュアルを作成している、こちらの方が正しいやり方ではないか、との発言があった。討論の結果、地域や事業所の事情により状況が異なるので、連絡方法については消防署と連携して適したマニュアルを作成するのが望ましいということになった。例えば東京大学では構内で車が通れない道があるため、消防車を火災現場にスムーズに誘導するために専門の部署から消防署に連絡をすることになっているとのことである。また、消防署としてもRI施設の消火についてはとまどいがちなので、何をどのように扱う部屋なのか、予め知らせておくのもよいという意見が出された。（マニュアルは小冊子の形態で配布されました）。

「外国人のための教育訓練用資料作成について」（この報告についてはスライド

印刷の資料はありません) では、資料作成の中間報告が行われました。協議会に対して、外国語、特に英語以外の外国語(中国語)の放射線教育用資料作成の要望があるが、資料はできてもそれを中国語などで説明するのは非常に困難なので、公用語という位置付けで英語に限って資料の作成を進めている。出版されているテキストをベースにしたい。絵などの著作権についても交渉をして行きたい、また、テストを実施するのは非常に良いことである、との報告がなされた。

「大学等の放射線施設における作業環境測定アンケート結果について」(この報告についてはスライド印刷の資料はありません)。アンケートの非常に膨大なデータをスライドで次々と示されました。おおまかに言うと、検出限界以下の数値が出ている場合が非常に多いとのこと。また実施方法についても、委託をどのようにしているか各事業所でいろいろあることが報告されました。実験中に測定を行ったがやはり出なかったという報告もありました。フローアから検出限界以下とは何をもっていつているのかという質問がありました。バックグラウンドと同じレベルのことであるという回答でしたが、バックグラウンドとは何かという議論に発展しました。検出器に何も入れない時の値がバックグラウンドなのか、放射線を使用しないところの空気の測定値がバックグラウンドなのか話し合いが行われました。

その他の委員会報告はありませんでした。

(中川記)